

子どもと治療者の協同作業

—対象喪失不安の強い5才男児の遊戯療法過程をめぐって—

三 村 保 子 （西南女学院短期大学）

1. 研究の目的

子どもの心理治療においては、子どもは病識が乏しく、治療理解や治療意欲があいまいであり、周囲の大人の判断によって治療が求められることが多い。だからこそ、一層、子どもが自分の感情を自由に表現できると感じられるような雰囲気の中で、治療者とともに、快い驚きや新鮮な喜びを体験できる治療場面が用意される必要がある。そして、そのなかで、子どもと治療者の協同作業が行われ、子どもの成長が促されていく過程が展開されるのである。

この報告では、母親に対する強い対象喪失不安によって行動を規定され、不適応状態に陥っていた男児と筆者の遊戯療法場面での協同作業を明らかにし、治療者の役割について考察したい。

2. 方法

1984年11月から1985年 3月までの 5か月間に、子どもの遊戯療法10回、母親面接 3回、父親面接 1回、両親との面接 6回を筆者が担当。

遊戯療法の記録に基づいて、治療を促進させた子どもと治療者の協同作業を検討していく。

3. 事例

クライアント：初診時 5才11か月の男児M、幼稚園在園。

家族構成：父親（35才、地方公務員）、母親（34才、専業主婦）、姉（11才、小学校 4年生）、M。

来談経路：幼稚園担任教諭の勧めによる。1984年 2月頃（5 才 2か月頃）からMはささいなことをきっかけとして情緒不安定になり、友だちにいたずらをし、相手が泣くまで続ける。注意すると「幼稚園をやめたい」「死にたい」などと口走る。そしてこうした大さわぎの後、皆から嫌われてしまったのではないかとひどく気にすると担任教諭は述べる。

インテーク面接時の印象：Mは母親と幼稚園担任教諭につきそわれて来院。やや小柄できゃしゃな身体つきである。緊張気味であるが、治療者の問いかけにはいきいきとした表情で適切な応答をする。面接の終わりにだしぬけに「僕、走るのが一番なんだよ」と言ったことばが印象的であった。[※] 自分は幼稚園で泣いた

りさわりだりすることで、今日病院に連れてこられたようだが、でも悪い子ではないんだよ」とアピールしたかったのであろうか。

母親はテキパキと治療者の質問に応じ、「Mは 4才で入園し、登園をいやがることもなく、家庭でとくに困っていることはない。今年 2月頃から連絡帳に幼稚園での行動が書かれるようになったが、Mは家ではそのようなことを話さないし、どうしてなのかよく分からない。やさしい担任の先生を好きだと思っているようだが…」と述べる。しかし、面接の後半で「私は気短で激しい性格なので、子どもを理づめに問いつめてしまう。だからMがイライラするのでしょうか。夫が叱らないので私が怒り役にまわってしまう」と、母親はこれまでの自分のやり方でよかったのかという不安を垣間みせた。

心理診断および援助方針：Mは年齢にふさわしい形で依存欲求や攻撃欲求を表現する方法を身につけていない。おそらく母親との安定した関係のなかで、そのような欲求を表現する体験が充分もてなかったのであろう。週 1度の遊戯療法（1回50分間）と母親面接の治療契約を行った。

治療過程：以下遊戯療法場面でのMと治療者の協同作業のいくつかを記述する。

〈第 1回・2回・3回〉

Mは箱庭療法の砂箱・玩具に興味を示す。ワニにゾウ・カメ・サイをかみつかせ、横倒しにして砂に埋めていく。しかし 3回目には、砂からカメを掘り出して「先生、あったよー」とうれしそうに大声をあげる。

ビニール製ハンマーで治療者をたたき、声を出してはしゃぐ。ジャンケンをして勝った方がハンマーでたたき遊びのなかで、Mは葛藤なく楽しんでいるようす。

〈第 4回〉

Mは自分の大切なサッカーボールを持参し、治療者めがけて力一杯ボールをけってくる。Mは真剣に相手をしてもらえる喜びや、自分の思いのままに治療者をリードできる喜びを満面に表している。

電話機の絵を描き、Mは治療者に次回の約束をとりつけてくる。

〈第 5回・6回〉

砂箱に川をつくり、橋を渡し、汽車を走らせる。砂

箱の外にプラレールを敷き、駅やトンネルを置き、新幹線を走らせる。電池で動くミニカーを持参。今回初めて砂箱の外に玩具をはみ出させて遊んだ。

第 6 回目の終了時に他のクライアントが入室すると、M はもっと遊びたいと主張。治療者が終了を告げると M はビニール製ハンマーで治療者をたたき、機嫌よく手を振って帰っていく。

〈第 7 回〉

M は、幼稚園で O 君とけんかをした。家では毎日、姉とけんかをするので、小学校へ入学できないかもしれないと訴える。〃けんかをする悪い子〃の自分にこだわり、罰として自分の望んでいることが失われるのではないかと不安を治療者は受けとめ、「仲良しげんかだったら、またすぐ仲直りできるのよ」と伝える。M はひどく真剣な面持ちで「そうかもしれんね」と応じ、安心した表情となる。

〈第 8 回〉

M の作る箱庭は、川に舟が浮かべられ、川岸に家並みができ、馬・牛・鹿・アヒルなどの動物が出現し、のどかなものになっていく。この日、M はこんなことを言う。「かぜをひいて幼稚園 2 日休んだよ。お風呂に入れなかった。僕、お風呂好きだから毎日入りたい。あったかいからお風呂好き」。M は治療者の手に触れ、「先生のお手であったかいね」と。思わず握手をすると、M は笑顔で肩をすくめる。

〈第 9 回〉

M は来院するとすぐ、「僕、幼稚園卒園したよ。早く学校にいきいたいな」と言い、急いで次のような心配事を訴える。「お姉ちゃんから聞いたけど、学校に悪い子（いじめっこ）がいるんやて」。さらに「お姉ちゃん勉強せんで馬鹿になってるみたい。僕、まだ学校にあがってないので勉強せんでいいね」と。治療者は M の不安を受けとめる。

先回提案しておいた治療終結を話題にすると、M は「先生ずっとここに居るの？」と治療者の居場所の確認をする。「そうよ、金曜日のお昼はずっとここに居るのよ」と治療者の恒常性を伝えると「ウン、分かった」と M はうなづく。

〈第 10 回〉

最終回。M から小さな花束をプレゼントされる。治療者からは 6 回目治療時に M の求めに応じて写した M の写真の数枚を渡す。

M は砂箱一杯に、家具・人形を並べる。M の箱庭に人形・家具が登場するのは初めてのこと。登場人物 5 人は家族 4 人と治療者なのであろうか。M が家族のな

かで情緒的安定を体験しつつあることを汲み取った治療者は、小学生男児と母親の設定でロールプレイングを提案し、やりとりを楽しむ。

M は退室後一度ふりかえり、スキップしながら母とともに帰っていった。

4. 考察

M は常に母親の期待する〃良い子〃でなければ、母親の愛情を喪失するのではないかという不安に拘束されていた子どもであった。つまり〃けんかしてはいけない子〃〃母親に反抗してはいけない子〃の枠の中に封じ込められ、いきいきとした情緒的体験から疎外されて自由な自己表現を閉ざされていたといえよう。このことは直接母親を対象とする生活場面だけでなく、幼稚園生活においても同様に M を拘束しつづけていたのである。思いどおりの自己評価を保てない状況に遭遇すると極度に混乱し、セルフ・コントロールを失うという具合であった。そして、このことは M の対象喪失不安を一層増強させる引きがねとなり、M にとって大切な担任教諭から嫌われてしまったとの思い込みで、「死にたい」などと自暴自棄に陥っていたと考えられる。

さて、治療者は M に対し、できる限り心理的に保護された時間と空間を用意して、M が表現するさまざまな言語的・非言語的メッセージを受けとりたいたくもろんだ。

治療過程における協同作業として記述してきたように、M はプレイルームのなかで遊びを介して、治療者に甘えや攻撃を葛藤なく向けることができた。M は治療者の前で、のびやかに自己表現し、それが受け入れられる体験を積み重ねながら、幼少期から身につけてきた感情パターンを修正することが可能になっていった。M と治療者はともに治療的退行をし、M の怒りや悲しみ、喜びを共有しあったといえよう。プレイルームでのこのような体験は M の現実の生活場面のためのリハーサルとすることができた。M は周囲の人々に対し、開かれたかかわりを発展させることができるようになっていったのである。（本稿では両親に対する支持的話し合いについては割愛したが、子どもと親の心の〃架け橋をする〃役割をとった。）

村瀬嘉代子氏が述べているように、^(註)子どもの治療者には、子どもが新たな体験を統合していく時の対象としての柔軟性と、同一視のモデルとしての一貫性、そして安心感の源となり得る安定した姿勢をバランスよく維持することが求められている。

^(註)村瀬嘉代子「子どもから見た治療者」季刊精神療法 5, 3.